

私には小さいころの記憶がない。両親の顔も覚えていない。物心ついたときからとある町の盗賊団で盗みを行ったりと、悪事を働く日々を過ごしてきた。私達が暮らしているのは、いわゆるスラムといわれるところで、盗賊団に拾われた私は、ボス命令で近隣の町や都市から食料やお金を盗むことを繰り返してきた。そうすることが私の仕事だった。私のような身寄りのない女は、盗みをするか、身体を差し出すかでもないかと、生きていけなかった。

ある日、私はアジトの近くに、男がひとり、苦しそうに倒れているのを見つけた。ここじゃ行き倒れや、私達みたいな賊にやられて倒れてるなんて良くある話だ。私はそれを無視しようとした。だがその男は、町でも見たことのないような服を着ていて、髪も見たことのない金色の色をしていた。今までの人生で見たことのない男の姿に、私は興味を引かれた。その男は水を欲していた。だから私は水を与えた。

男はやはりこのあたりに住んでいる人ではなかった。私はこの近隣のことしか知らなかったから、外の世界から来た彼と話がしたくなかった。私ができることを伝えると、彼はお礼にと私に自分の暮らしていた場所や、そこでの暮らしなど、いろいろな話を聞かせてくれた。

彼の暮らしていた世界のことは正直よくわからなかった。私はここで拾われ、盗賊団で戦闘技術と盗みのやり方を教えられて、それだけで生きてきた。彼の話す国という世界はそんなことはなく、盗みをする人も、争いを起こす人もほとんどないらしい。食料や水に困ることもないらしい。こでの暮らししか知らない私にとって、夢のような話だった。

そんな話をしていると、血相を変えた私の仲間が私のもとに来了。どうやら私達の仲間の誰かが食料を盗んで逃げたらしい。現在アジトを離れていた私も疑われているとも聞いた。

仲間と共にアジトに帰ろうとすると、彼が私の服の袖を掴んで、自分が証人になると言うてくれた。

私は彼を連れて、仲間と共にアジトに戻った。アジトに戻る途中に知ったのだが、彼は眼が見えなかった。だから私がおぶって帰って来た。アジトに戻ったのが私が最後で、さらに知らない男を連れてきたとして、私の疑いは一気に深くなってしまった。そこで彼が前に出て、今日の私との出会いを説明した。そして、なんと盗んだ犯人の名前と盗んだ

食料の隠し場所、盗んだ目的までも言い放ったのだ。私も仲間達も半信半疑だったが、名指しされた人は、動揺を隠せずに、反論もできなかったので、彼の言ったことは正しかったと証明された。彼は、眼が見えない代わりに真実が見えるのだった。

それからというもの、誰もが彼を利用しようとした。盗みに利用したり、仲間の中に裏切り者はいるかを調べたりなど、好き勝手に。彼は従わなかったもので、牢屋のようなところに閉じ込められ、食料も十分に与えられなかった。

彼が閉じ込められてから数日が過ぎた。彼にはあれから一度も会えていない。私はいつものように盗みを繰り返していた。ただ、モヤモヤする。彼の話をもっと聞きたい。私の知らない世界の話が聞きたい。見てみたい。そう思った私は、彼を助け出して盗賊団を抜ける決意を固めた。

数日後、計画を実行するチャンスが突然やってきた。彼の見張りが一人しかいないのだ。私はその夜自分のナイフを手に取り、彼のもとへとかけた。見張りは居眠りをしていた。私は駆けた。

闇が味方をしてくれた。見張りは私に気づくことなく倒れた。手応えはあった。人を刺したことなどなかったが、深く刺した。死んだかもしれない。そう思うと、手が震え始めた。しかし震えてる場合ではなかった。私は捕らえられている彼のもとに急がなくてはならない。

その刹那、背後からの攻撃で、私は右足を切られた。切断はされなかったが、腫を切られた。見張りはまだ生きていたのだ。私は死を覚悟した……が、次の攻撃はなかった。どうやら見張りは最後の力を振り絞って剣を振ったのだ。

殺されなかったと安堵したのも束の間、私の右足に痛覚が戻った。激痛で顔が歪む、まともに歩くこともできない。私は手で這って彼の元へ行った。そして伝えた。彼の話をひとつ聞きたかったこと。彼のいた世界へ行ってみたかったこと。……人を殺めてしまい、満足に足を動かすこともできなくなってしまい、彼を連れて逃げるのが叶わなくなってしまうこと。私は知らず知らずのうちに涙を流していた。君は全て知っていたのかも知れない。その全てを知った上で私を強く抱きしめてくれた。暖かかった。彼は大きな身体ではなかった。でも、私を抱きしめるには充分だった。

私が落ち着いたのを見て、彼は精悍な顔つきで一緒に行こうと言ってくれた。倒れていた自分を助けてくれたお礼はまだ済んでいないからと言って。あの時とは逆で、今度は私がおんぶをされた。そして闇の中、私達はアジトを抜け出した。

私達がアジトを抜け出した次の日、追っ手がやってきた。だが彼の眼には追っ手がいつ、どこで、どのように襲ってくるのか全て判っていた。片足のハンデがあつたとしても、敵の動きがわかつていれば、対処はさほど難しくない。私は迫り来る追っ手を斬り倒し続けた。一人殺してしまえば、二人も三人も同じことだつた。彼は、私をただの盗賊からひとりの戦士へと変えてくれた。ただ惨めに生きるために盗みを繰り返していたのとは違う。私は彼を守るといふ生きる意味を見つけた。

時は流れ、とある町では小さな伝説がまことしやかに囁かれていた。

町外れに建てられた孤児院には、大量の水や食料が保管されており、それを目当てに何人もの賊が盗みに入ったり、攻め込んだりした。その孤児院を守っているのは、盲目の青年と、まともに走ることの出来ない少女の二人だけだつた。にもかかわらず、水や食料を奪うことが出来た人間は誰一人いなかったと……。